様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３５０９２６

研究課題名（和文）幼児教育と小学校教育の接続期に求められる支援の縦断的追究：幼小の段差の克服の過程

研究課題名（英文）A prospective longitudinal study of the transition from nursery school to primary school: Investigating effective support services for parents and children

研究代表者
滝口　圭子（TAKIGUCHI, Keiko）

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：６０３６８７９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：年長児から小学校2年生までの3年に渡り，子どもと保護者を対象とする質問紙調査，インタビュー調査，観察調査を実施した。保護者は不安や困難を経験しながらも，家族，担任，知り合い等からサポートを得て子どもを支援し，1年生修了時には接続期の段差の意義を認識していた。接続期の支援として，就学前は小学生の保護者との懇談会，就学後は同学年保護者との懇談会や担任以外の学校の相談窓口を設けることが挙げられる。また，就学時健康診断が保護者の不安を軽減する機会となっているとは言い難いため，年長児と保護者が心身ともに健康に就学を迎えるうえで真に必要な情報を，種々の実状を反映しながら精選する必要があるであろう。

研究成果の概要（英文）：The present study investigates the attitudes of parents and their children towards transition from nursery school to primary school. Parents completed questionnaires about their views of transition and mental health and learning conditions of children at school and at home for three years. The results suggested that parents supported their children with the help of family, class teacher and acquaintances, while they faced with the anxiety during school transitions. Additionally, parents tried to introspect about their anxiety of transition and viewed transition gap as an important opportunity for children to grow, learn and equip them to be more resilient in the future. Support services which required from parents during transitional term were establishment of consulting service. Information about primary school given at the health examination for children starting school age must be analyzed and selected more carefully, since that couldn’t reduce anxiety and stress in parents.

研究分野：発達心理学，保育学

キーワード：小学校就学前後の接続　環境移行　家庭との連携　就学時健康診断　保護者支援　移行支援　小学校教育　発達の連続性

1. 研究開始当初の背景

近年，幼児教育（保育所や幼稚園，認定こども園等での幼児を対象とした教育）と小学校教育との接続（以下，幼小接続と表記）の実態を正確にとらえ，効果的な接続を追究する動きが活発である。接続期を経験する子どもと保護者の意識を明らかにし，その実態をとらえた支援の追究は喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は，第一に幼小接続を支援する連携実践の意味を明らかにすることである。第二に子どもと保護者が段差を克服する過程を明らかにすることである。第三に小学校就学という大きな環境移行に際して，子どもと保護者に対して提供することが望ましい具体的支援を提案することである。

3. 研究の方法

（1）観察調査

＜平成 27（2015）年度 a＞

調査時期：平成 27（2015）年 9 月 1 日（火），2 日（水），4 日（金），7 日（月），8 日（火），10 日（木），14 日（月）の 7 日間

観察対象：金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園年長児 T 組と同附属小学校 1 年 A 組の生活科を活用した連携実践「船作り」

＜平成 27（2015）年度 b＞

調査時期：平成 28（2016）年 3 月 1 日（火）

観察対象：I 県 Ko 市立 R 小学校 1 年生と Ko 市立 R 保育所年長児の「年長さんとの交流会」

活動内容：1 年生が体育館の舞台で歌とダンスを披露する，年長児と 1 年生が体育館でバナナ鬼とドッジボールをする，教室で 1 年生が手作りのプレゼントを年長児に手渡す

＜平成 27（2015）～28（2016）年度＞

調査時期及び観察対象：平成 27（2015）年 10 月から翌年 3 月にかけて，金沢大学附属幼稚園年長男児 2 名を対象に計 9 回，継続して平成 28（2016）年 4 月から 7 月にかけて，同附属小学校に就学した同じ男児を対象に計 14 回の観察を実施した。

活動内容：平成 27（2015）年度は幼稚園の自由遊びでの造形活動を，平成 28（2016）年度は小学校の図画工作の授業を観察した。

＜平成 29（2017）年度＞

調査時期：平成 29（2017）年 10 月 17 日（火），18 日（水）の 2 日間

観察対象：金沢大学附属幼稚園年長児と同附属小学校 1 年 A 組の生活科を活用した連携実践「秋見つけ」

（2）質問紙調査

＜平成 27（2015）年度：年長児＞

調査時期：平成 28（2016）年 2 月下旬

調査対象：I 県 Ka 市内 20 か所（幼稚園 7，保育所・園 13），Ko 市内 6 か所（幼稚園 1，保育所 2，こども園 3），H 市内 7 か所（保育所・園 7）計 33 か所の年長児保護者に調査票を配布し，32 か所から回収した。保護者 865 名から回答を得た（回収率 77.0%）。

＜平成 28（2016）年度：小学校 1 年生＞

調査時期：平成 29（2017）年 3 月上旬

調査対象：I 県 Ka 市立小学校 10 校，Ko 市立小学校 6 校の小学校 1 年生保護者を対象に調査票を配布し，887 名（回収率 77.5%）から回答を得た。

＜平成 29（2017）年度：小学校 2 年生＞

調査時期：平成 30（2018）年 2 月下旬

調査対象：前年度と同様の小学校 2 年生保護者を対象に調査票を配布し，853 名（回収率 77.8%）から回答を得た。

（3）インタビュー調査

＜平成 27（2015）年度：年長児＞

調査時期：平成 28（2016）年 2 月～3 月上旬

調査対象：I 県 Ko 市内 6 か所の施設，機関の年長児 203 名を対象とした。

＜平成 28（2016）年度：小学校 1 年生＞

調査時期：平成 29（2017）年 3 月上～下旬

調査対象： I 県 Ko 市立小学校 5 校の小学校 1 年生 159 名を対象とした。全員が昨年度年長児の時にインタビュー調査を受けた。

＜平成 29（2017）年度：小学校 2 年生＞

調査時期：平成 30（2018）年 3 月上～中旬

調査対象：前年度と同様の小学校 2 年生 144 名を対象とした。ほぼ全員が一昨年度，昨年度にインタビュー調査を受けた。

4. 研究成果

（1）観察調査

＜平成 27（2015）年度＞

7 日間の連携実践「船作り」は，①「計画」→②「製作」→③「試乗（1 つのグループを除いて沈んだ）」→④「再度，製作」→⑤「試乗（全グループの船が浮いた）」という展開であり，最後は全グループの船が浮いた。④「再度，製作」の翌日，1 年生担任より活動が楽しくない児童について話題提供があり，クラス全員で話し合った。異校種間で継続的に連携すれば葛藤が生じる。だから連携を辞めるのか，だからこそ葛藤に向き合う経験を確保するのかが問われるといえよう。

＜平成 27（2015）～28（2016）年度＞

年長児及び 1 年生の製作の【目的】は，「作りたいから作る，遊びで使うために作る」（年長児）と「表現するために作る」（1 年生）という相違が，【対象】は「自分や友達の思考」（年長児）と「教科書または自分の思考」（1 年生），【方法】は「“考えながら作る”→“作りながら考える”という展開」（年長児）と

「“考えてから作る”→“考えながら作る”→“作りながら考える”という展開」(1 年生)，【評価】は「主たる評価者は友達，観点は実用度，具現度」（年長児）と「主たる評価者は教師，観点は巧緻性，制約下での独自性」（1 年生）という相違が認められた。図画工作を主要教科の周辺ではなく，中心に位置づけた合科的単元を提言した。

＜平成 29（2017）年度＞

1 日目は幼稚園勤務経験を持つ 1 年生担任のクラス，2 日目はそうした経験を持たない 1 年生担任のクラスと活動した。【年長児との関係づくり】は「互恵的な関係を暗示する（年長さんも 1 年生に教えてね)」(経験有）と「世話の授受関係を明示する（1 年生が年長児のお世話をします)」（経験無）という相違が，【指示の出し方】は「子どもが自身で考えるよう促し（どうしたらいいと思う？)，待つ」（経験有）と「即座に口頭で命令する（静かにしなさい)」（経験無）という相違が，【活動の組み立て方】は「活動内容が多く，活動に緩急がなく散漫」（経験有）と「活動に緩急があり，限られた時間を有効活用」（経験無）という相違が認められた。

（2）質問紙調査

＜平成 27（2015）年度：年長児＞

①入学に対する年長児の意識：高選択率順に「とても楽しみにしている」53.5%（463名)，「まあまあ楽しみにしている」40.4%（349 名)，「あまり楽しみにしていない」4.7%（41 名)，「楽しみにしていない」0.8%（7名)，無回答0.6%（5名）であった。94%の年長児が就学を楽しみにしていたが，楽しみではない年長児の存在も忘れてはならない。

②入学に対する保護者の意識：高選択率順に「とても楽しみにしている」49.3%（426名)，「まあまあ楽しみにしている」47.0%（407 名)，「あまり楽しみにしていない」2.9%（25 名)，「楽しみにしていない」0.6%（5名)，無回答0.2%（2名）であった。

③就学時健康診断の参加：「はい」98.4%（851 名)，「いいえ」0.7%（6名)，「その他」0.6%（5名)，無回答0.3%（3名）であった。

④就学時健康診断参加後の保護者の意識：高選択率順に「どちらともいえない」48.3%（418 名)，「少し安心した」26.7%（231名)，「少し不安になった」11.9%（103名)，「非常に安心した」10.4%（90名)，「非常に不安になった」1.3%（11名)，無回答1.4%（12名）であった。安心した保護者は37%であり，不安を軽減する機会になっているとは言い難い。

⑤入学前の準備の必要性：施設，機関での準備は「はい」38.4%（332 名)，「いいえ」55.8%（483 名)，「その他」3.8%（33 名)，無回答 2.0%（17 名）であり，家庭での準備は「はい」78.4%（678 名)，「いいえ」17.3%（150 名)，「その他」1.5%（13 名)，無回答 2.8%（24 名）であった。多くの保護者が，就学の準備は家庭で担うものと考えていた。

⑥小学校生活における不安な事項：4 件法（「1：ほとんど不安はなかった」～「4：とても不安だった」)を用いて 3 年間追跡した。年長児, 1 年生（就学前の不安, 現在の不安)，2 年生の結果を表 1 にまとめた。年長児で不安が高かったのは「友だちとのトラブルをうまく乗り越えることができる」，不安が低かったのは「はさみなど基本的な道具の扱い方が身についている」であった。

＜平成 28（2016）年度：小学校 1 年生＞

①小学校生活への適応：高選択率順に「まあまあ慣れている」49.1%（436名)，「とても慣れている」48.8%（433名)，「あまり慣れていない」1.1%（10名)，「全く慣れていない」0.5%（4名)，無回答0.5%（4名）であった。小1保護者の98%が，子どもが小学校に慣れていると評価した。

②慣れたと感じた時期：高選択率順に「6，7 月頃」37.7%（334 名)，「9，10 月頃」29.9%（265 名)，「4，5 月頃」15.1%（134 名)，「11，12 月頃」6.8%（60 名)，「1，2 月頃」3.9%（35 名)，「わからない」3.1%（28 名)，「まだ慣れていない」0.1%（1 名)，無回答 3.4%（30 名）であった。保護者の 4 割が 1 学期終了時期に，3 割が 2 学期半ばに学校生活に慣れたと評価した。就学後数か月をかけて小学校に馴染んでいくようだ。

③就学後の困ったことの生起と内容：「あった」54.1%（480 名)，「なかった」27.4%（243 名)，「どちらでもない」15.2%（135 名)，「わからない」2.8%（25 名)，無回答 0.5%（4 名）であった。5 割を超える保護者が困ったことがあったと回答した。自由記述回答（433 名）は，「友達関係」27.6%（122 名）が最も多く，「学校生活（忘れ物)」19.6%（87 名)，「登校渋り」13.1%（58 名)，「勉強・宿題」12.4%（55 名)，「放課後・学童」9.9%（44 名)，「家庭生活」9.7%（43 名)，「登下校」7.7%（34 名）と続いた。「友達関係」は「いじめのような出来事があった」「お友達に怪我をさせてしまった」「上級生からの心ない言動」「友人の輪にうまく入れない」という記述が，「登校渋り」は「朝，学校に行きたくないと泣き暴れる」「6 月から 7 月に学校へ行きたがらず，送ったり祖父母に協力してもらったり大変だった。その時期から髪を抜く癖が始まった」「精神的な事（不安など）から毎日のように腹痛を訴える」という記述があり，学校生活のストレスにさらされる 1 年生の深刻な葛藤が確認された。

④就学後の困ったことの経過：「解決した」53.0%（256 名)，「解決しなかった」14.3%

（69 名），「どちらでもない」25.1%（121 名），「わからない」6.4%（31 名），その他 1.2%（6 名）であった。

⑤困った時に相談や支援を求めた相手：困ったことがあった保護者（480 名）に複数選択を求めた結果，「家族」「小学校の担任教諭」が多く選択された（図 1）。「年長児の時の担任保育者」「年長児の時の担任以外の保育者」が選択されている点も興味深い。「その他」として主治医，スクールカウンセラー，警察，当事者の親，ご近所の先輩お母さん等が挙げられた。一方で，誰にも相談しない（できない）保護者の存在も浮き彫りにされた。

⑥就学を控える年長児保護者への助言：自由記述回答（546 名）の内容は，「心配ない，子どもを信じる」59.0%（322 名）が最も多く，「生活習慣（生活リズム，挨拶，子どもの話を聞く）」17.2%（94 名），「学校生活（登下校，平仮名）」11.2%（61 名），「ネットワーク作り」8.6%（47 名），「特にない」3.1%（17 名），「その他」0.9%（5 名）と続いた。6 割の保護者が「心配ない」と助言したことは大変興味深い。「大人が思っているよりも子どもは環境に順応する」「子どものことを信じて待つこと」「親が不安になると子どもに不安が伝わるので，自信を持って通わせて欲しい」という記述が寄せられた。

⑦就学前後の接続期に必要な支援：就学前の支援の自由記述回答（235 名）の内容は，「学校生活（学習，給食，トイレ）」31.9%（75 名）が最も多く，「学校訪問（模擬授業，交流）」31.5%（74 名），「説明や質問の機会，保護者のネットワーク作り」9.8%（23 名），「登下校」8.9%（21 名），「集団活動，子どものネットワーク作り」8.9%（21 名），「生活習慣」3.0%（7 名），「その他」6.0%（14 名）と続いた。「学校生活」では「平仮名の読み書き」「鉛筆の持ち方」，「学校訪問」では「小学校体験や小学生とふれ合う機会」という記述が認められた。就学後の支援の自由

表 1　調査時期別にみた小学校生活に対する保護者の不安の程度

	年長児	小 1 入学前	小 1 現在	小 2
1.　教師や他人の話を最後まで落ち着いて聞くことができる	2.3	2.3	1.8	1.9
2.　授業中じっと座っていることができる	2.2	2.1	1.6	1.5
3.　小学校のきまりを守ることができる	1.9	1.9	1.5	1.5
4.　学校の公共のものを大切にできる	1.8	1.7	1.4	1.5
5.　ひらがなの読み書きができる	1.9	1.9	1.3	1.2
6.　時間割通り時間を意識して行動できる	2.4	2.3	1.6	1.7
7.　自分の考えを伝えることができる	2.6	2.6	2.1	2.1
8.　友だちとのトラブルをうまく乗り越えることができる	2.7	2.8	2.3	2.3
9.　自分のものを整理整頓できる	2.4	2.5	2.1	2.4
10.　集団の中で自分勝手な行動をとることがない	2.0	2.1	1.6	1.7
11.　はさみなど基本的な道具の扱い方が身についている	1.6	1.6	1.3	1.4
12.　給食を残さず食べることができる	2.1	2.1	1.7	1.7
13.　授業についていける	2.4	2.3	1.9	1.9

注）数値が高いほど不安が高いことを示す。

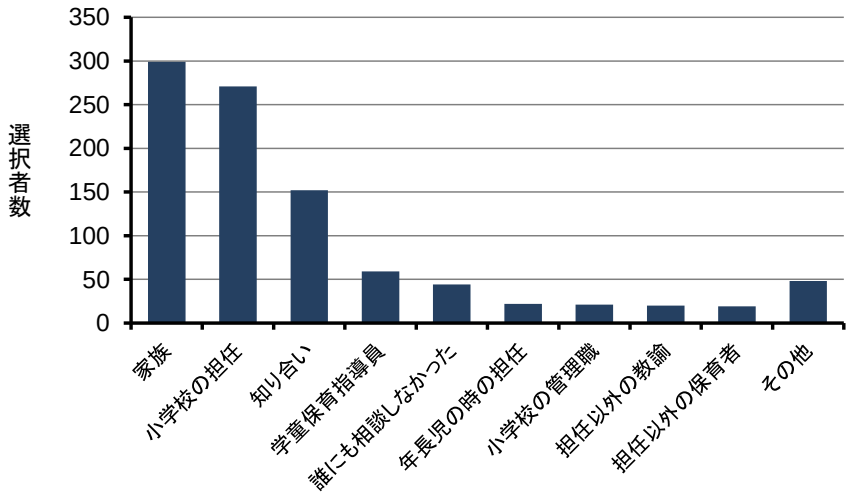

図 1　小学校 1 年生期の困った時に保護者が相談や支援を求めた相手

記述回答（169 名）の内容は，「登下校，不審者対策」32.5%（55 名）が最も多く，「放課後，学童，夏休み」23.7%（40 名），「学校生活（担任の対応）」20.7%（35 名），「相談窓口，情報交換の手段」17.8%（30 名），「その他」5.3%（9 名）と続いた。「放課後，学童，夏休み」では「学童クラブが 18 時までの受入であるが，もう少し長くしてほしい」「学童ではなく，学校で放課後過ごせる時間があると嬉しい」という記述が，「学校生活」では「教室では 1（先生）対 30（生徒）なので，1 人 1 人の気持ちを尋ねたり，聞いてくれたりする機会があれば」「補助教員による流動的なクラスのサポート」「急に勉強ばかりでなく，もう少し自由時間があったら」，「相談窓口，情報交換の手段」では「幼稚園のようにもう少し子どもについて細かいケアをしてほしい。何かあっても相談しにくい。事務的な対応が多く，子どもに“何かあったら先生が助けてくれるよ”と本当には言いにくい」「担任の先生に聞きたい事があっても，子どもの連絡帳に書くのがためらわれる（子どもが見るため）。親と担任の連絡手段があるとよい」「授業参観ではなく，クラスのありのままの状態を動画などで配信してもらえると，素の子どもの学校生活を知る事ができる」という記述が認められた。

⑧小学校生活における不安な事項：1 年生時で不安が高かったのは「友だちとのトラブルをうまく乗り越えることができる」，低かったのは「はさみなど基本的な道具の扱い方が身についている」「ひらがなの読み書きができる」であった（表 1）。年長児期の調査結果と同様であり，不安の低い項目に「ひらがなの読み書きができる」が加わった。

＜平成 29（2017）年度：小学校 2 年生＞

①小学校生活への適応：高選択率順に「とても慣れている」58.7%（501名），「まあまあ慣れている」38.9%（332名），「あまり慣れていない」1.6%（14名），「全く慣れていない」0.4%（3名），無回答0.4%（3名）だった。

②慣れたと感じた時期：高選択率順に「1 年生 2 学期」35.8%（305 名），「1 年生 1 学期」22.3%（190 名），「1 年生 3 学期」15.6%（133 名），「2 年生 1 学期」12.3%（105 名），「2 年生 2 学期」6.4%（55 名），「わからない」4.2%（36 名），「まだ慣れていない」0.1%（1 名），無回答 3.3%（28 名）であった。7 割の保護者が 1 年生時に，2 割の保護者が 2 年生時に慣れたと評価した。それぞれの子どもの小学校への適応を待つ姿勢が求められる。

③就学前後の段差に対する保護者の意識：高選択率順に「少しの段差はあってもよい」55.3%（472 名），「わからない」33.4%（285 名），「段差はない方がよい」6.1%（52 名），「その他」2.5%（21 名），無回答 2.7%（23 名）であった。6 割の保護者が段差の存在を肯定的に受け止めている点は注目に値する。就学から 2 年を経る間に，段差を乗り越えたあるいは段差を乗り越えようとする子どもの姿を，保護者は目の当たりにしたのであろう。「その他」には「子どもの順応力を信じたらよい」「なくそうとせず“ある”と伝えればいいのでは」という意見が寄せられた。

④「なくした方がよい段差」と「あってもよい段差」の内容：「なくした方がよい段差」の自由記述回答（133 名）の内容は，「学習以外の学校生活（時間割，給食，トイレ）」55.6%（74 名）が最も多く，「担任と子どもの関係」18.1%（24 名），「学習（読み書き，宿題）」15.0%（20 名），「担任と保護者の関係」11.3%（15 名）と続いた。「あってもよい段差」の自由記述回答（58 名）の内容は，「学習（読み書き）」と「学習以外の学校生活」がそれぞれ 37.9%（22 名），「段差の必然性への言及」が 24.2%（14 名）であった。

⑤小学校生活における不安な事項：2 年生時で不安が高かったのは「自分のものを整理整頓できる」，低かったのは「ひらがなの読み書きができる」であった（表 1）。「ひらがなの読み書きができる」は，年長児期の不安が高いわけではなかったが（平均値 1.9），2 年生時では最も低いという点は興味深い。

【幼小接続を支援する連携実践の意味】

年長児にとっては知識と経験を持つ 1 年生を前に，自分でできることや振る舞い方を考える機会に，1 年生にとっては年長児期の自信が覆い隠される日々にあり，本来の自分を表出する機会になる。年長児は保育者の元を離れ，自身で物事を推進する経験を得る。

【子どもと保護者が段差を克服する過程】

保護者の多くが不安や困難を経験するが，家族，担任，知り合い等からサポートを得ながら子どもを支援する。登校渋りにも根気強く向き合う。就学後 1 年が過ぎる頃には，多くの保護者はかつての不安を内省し，接続期の段差の意義を認識するようになる。

【幼小接続期に求められる具体的支援】

保護者の不安や質問を受ける窓口や機会の提供が挙げられる。就学前は小学生の保護者との懇談会を，就学後は同学年保護者との懇談会や担任以外の学校の相談窓口を設けたい。また，就学時健康診断が保護者の不安を軽減する機会となっているとは言い難いため，年長児と保護者が心身ともに健康に就学を迎えるうえで真に必要な情報を，種々の実状を反映しながら精選していきたい。そして，小学校 1 年生担任には，就学までにどのような背景や経験の違いがあろうとも，全ての児童の発達と学習を支援し保障するのだという覚悟と矜持と力量が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江・草場勇介・髙城香織　大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討（3）：みそ汁作り・お弁当交流会についての幼稚園での話し合いから　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要　教育実践研究，**43**，15-26，2018，査読有

②若山育代・滝口圭子　年長後期から小学校 1 年スタート期にかけての「造形活動に向かう態度」の変化に関する事例的縦断研究　美術教育学，**38**，479-489，2017，査読有

③滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・川谷内哲二・西多由貴江・中田泉・橋本正恵・服部浩司　デジタル絵本でつながる幼小中高連携活動 2：児童・生徒の評価　金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要，**8**，61-69，2016，査読有

④綿引伴子・滝口圭子・尾島恭子・松田洋介・川谷内哲二・西多由貴江・中田泉・橋本正恵・服部浩司　デジタル絵本でつながる幼小中高連携活動 1：活動概要と担当教員・観察者の評価　金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要，**8**，49-60，2016，査読有

⑤滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江　大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討（2）：みそ汁作り・お弁当交流会についてのインタビュー調査の結果から　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要　教育実践研究，**40**，37-47，2014，査読有

⑥尾島恭子・綿引伴子・滝口圭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江　大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討（1）：みそ汁作り・お弁当交流会の事例から　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要　教育実践研究，**40**，27-36，2014，査読有

〔学会発表〕（計 10 件）

①滝口圭子・富田昌平・浅川淳司・布施光代・深田昭三　保育のなかの科学：数概念と生物概念の発達から実践をみつめる　日本発達心理学会第 29 回大会，2018 年 3 月 25 日，東北大学（宮城県）

②滝口圭子・吉田真理子・湯澤美紀・藤野友紀・平沼博将　保育者の実践研究と発達心理学研究者：協働の中身を問う　日本発達心理学会第 29 回大会，2018 年 3 月 23 日，東北大学（宮城県）

③Keiko TAKIGUCHI The attitudes of parents of nursery school children towards making the transition to a primary school next spring. The 31st International Congress of Psychology, 2016.7.18, PACIFICO Yokohama（神奈川県）

④滝口圭子・若山育代・丁子かおる・杉村伸一郎　幼児の造形活動から考える小学校図画工作との連続性と非連続性　日本保育学会第 69 回大会，2016 年 5 月 8 日，東京学芸大学（東京都）

⑤滝口圭子　幼稚園での里山自然活動の意義を考える：K 幼稚園の分析から　日本保育学会第 69 回大会，2016 年 5 月 7 日，東京学芸大学（東京都）

⑥滝口圭子・浅川淳司・髙城香織・林博之・中川好美・田爪宏二　小学校教諭と考える幼児教育と小学校教育の連携・接続　日本発達心理学会第 27 回大会，2016 年 4 月 30 日，北海道大学（北海道）

⑦滝口圭子　小学校就学を控えた幼稚園年長児の意識：年長児がとらえる段差とは　日本発達心理学会第 27 回大会，2016 年 4 月 29 日，北海道大学（北海道）

⑧伊藤順子・湯澤美紀・滝口圭子・倉盛美穂子・山崎晃・岩立志津夫　学校教育における読解力と幼児教育とのインターラクション：読解力を生み出す「学びのしかけ」とは　日本教育心理学会第 56 回総会，2014 年 11 月 8 日，神戸国際会議場（兵庫県）

⑨滝口圭子・伊藤崇・田爪宏二・若山育代・杉村伸一郎　改めて幼児教育と小学校教育の学びの連続性を問う　日本教育心理学会第 56 回総会，2014 年 11 月 7 日，神戸国際会議場（兵庫県）

⑩滝口圭子　幼稚園での里山自然活動を保護者はどうとらえているか：K 幼稚園の分析から　日本保育学会第 67 回大会，2014 年 5 月 18 日，大阪総合保育大学（大阪府）

〔図書〕（計 3 件）

①滝口圭子　田爪宏二，他 8 名著　ミネルヴァ書房　よくわかる！教職エクササイズ 2　教育心理学　2018，20-33.

②滝口圭子　田爪宏二，他 19 名著　あいり出版　保育の心理学：保育の中で捉えるこころのすがたと育ち　2016，240-249.

③滝口圭子，他 13 名訳　北大路書房　認知心理学のフロンティア　ワーキングメモリと日常：人生を切り拓く新しい知性　2015，192-214.

6. 研究組織

（1）研究代表者

滝口　圭子（TAKIGUCHI Keiko）
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：60368793

（2）研究分担者

田爪　宏二（TAZUME Hirotsugu）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：20310865